

黄庭堅詩釈析(二)―叔祖・叔父の隠士詠

加藤 国安

はじめに

前稿では黄庭堅の少年期を取り上げたが、この頃の詳しい事跡は、任淵「黄山谷年譜」にも黄笛「山谷先生年譜」にもない。欠落していて不明であり、その再現はきわめて困難であるが、分かる範囲で記すこととする。

仁宗・嘉祐八年(一〇六三)、山谷十九歳。初めて試験に参加し洪州の首席となる。地方予選(郷貢進士)の資格をもって京師の中央の最終審査(礼部試)に赴き、翌年の英宗・治平元年(一〇六四)、落第しそのまま京師にとどまった。この頃の一つのデカダンスな気分を伝えるのが、次の詞である〔①〕。

「惜餘飲」

四時美景

正年少賞心

頻啓東閣

芳酒載盈車

喜朋侶簪合

杯觴交飛勸酬獻

正酣飲

醉主公陳榻

坐来争奈

玉山未頽

興尋巫峽

「余飲を惜しむ」

四時の美景

正に年少 賞心し

頻りに東閣に啓す

芳酒載せて 車に盈ち

朋侶の簪合を喜ぶ

杯觴 交こも飛んで 酬獻を

正に酣飲すれば 勸め

醉主公 陳榻に

坐し来たるも 争いかん奈せん

玉山 未だ頽れず

興もて 巫峽を尋ねん

四季 それぞれの

心にしみる 美しき眺めよ
この青春の心は すっかり

とりことなつてしまひ

しきりに 仲間求めて

東閣に向き 誘い出す

いざ うま酒を

車いっばいに 載せ

友がきらとの 懇親会

酒席では 杯が

あつちに行つたり こつちに來たり

盛んに 応酬す

すっかり 出来上がった

この酔っ払いの ご主人は

かの陳蕃殿の 腰掛けに――

さあ座つて どうする

若いおいらだ まだまだぞ

余興で 巫山まで行つちやるか

まず双調の前関である。「陳榻」とは、後漢の太守・陳蕃が用意した椅子のことで、礼をもって賢人を遇することに喩えたりする。『後漢書』列伝卷四三徐穉伝にいう、「徐穉、字は孺子。豫章の南昌の人なり。家貧しくして常に自ら耕稼し、其の力に非ずんば食はず。恭儉・義讓にして居る所(の人々)は其の徳に服す。屢しは公府に辟とらかるるも起たず。時に陳蕃、太守為り。礼を以て署の功曹に請ふ。穉、之を免がれざれば、既に謁して退く。蕃、郡に在りては賓客を接もてなさず。唯だ穉の來るや、特に一榻を設け、去れば則ち之を懸く」と。黃庭堅は同郷人の徐穉の人となりを敬愛して、「徐孺子祠堂」(熙寧元年 二十四歳)がある。この詞には、自ら徐孺子の風貌を気取る様が見てとれる。若き日の黃庭堅は、この徐孺子然とした清貧とその對極の奔放との間にあって、「煩惱」のるつぽを抱えていたのである(「把我身心、為伊煩惱」我が身心を把とらふるに、伊れ煩惱を為す／「沁

園春「②」。

歌闌旋焼絳蠟

歌闌たけなわにして 旋たちまち絳蠟こうろう焼く

況漏軋銅壺

況わうんや 銅壺ろうてん 漏軋し

烟断香鴨

烟の香鴨に断つをや

猶整醉中花

猶ほ醉中の花を整えんとして

借纖手重挿

纖手を借りて 重ねて挿す

相将扶上

相将あひまて扶たすけ上あぐ

金鞍驪裏

金鞍きんあんの驪裏りうり

碾春焙

春焙しゅんぱいを碾ひき

願少延歛洽

願ねがふ 少すくしく歛洽かんごうを延のばすを

未須臾去

未なだ須すらく去いるべからず

重尋艷歌

重おもねて艷歌えんかを尋たずね

更留時霎

更さらに時霎じしやうを留とどめん

歌はたけなわ あつという間

紅い蠟燭は 溶けちまう

まして 銅壺の漏刻の

時計の針が 夜更けを告げ

鴨の形の香炉から

煙も立たなくなつては もうお開き？

なんのまだまだ 酔いの中

花を きれいに整えんと

美人の細き 手を借りて

もう一度 挿してみん

この身を 抱えて持ち上げる

金の鞍の 駿馬の背に

おいおい ちよいと待った

もう少し 楽しませてくれ

オレは まだ帰りとうはないぞ

次はどこぞで また歌謡曲のはしご

この短い時を どうにかして留めん

次いで双調の後闌。酒に美人、黄庭堅の青春が人並み

にはじけているのが分かる。それは山谷本人の懐旧としても詠まれている。

「逍遙楽」

夢当年少

夢 年少に当たれば

对尊前上客鄒枚

尊前に対するは 上客の鄒枚

小鬟燕趙

小鬟の燕趙

共舞雪歌塵

共に舞雪 歌塵して

醉裏談笑

醉裏に談笑せり

馬興榮箋注には、「中年に宦遊し他郷に於ける時に作る」という。前漢の鄒陽や枚乘といった上客らと宴遊した日々を懐かしむ作である。官吏をめざすべく科擧の試験に応募しながらも、奥底では官吏としての人生に強い懐疑心を懐いており、若年ながら自由人への傾きが強かった。その思いを若さのままに浮かれ気分として体験してみたのだろう。黄庭堅が生来の脱俗的堅物でなかったことは、一応理解しておく必要がある。

しかし気ままな遊びに呆けていることもできない。そ

れはしばしの思い出にとどまり、またすぐ科擧の試験の準備に全身全霊を上げて取り組まねばならなかった。同二年、京師より帰省し、同三年（一〇六五）、黄庭堅二二歳。秋、再び郷試を受験し首席となる。そして同四年、黄庭堅が試験を乗り越えて礼部試に赴き進士に合格する時がくる。が、その前に治平三年の作から見ていこう。

一 叔祖少卿の影響

この頃、黄庭堅は黄家の人々から人生の深い生き方を学んでいる。以下、個々の作品に即してそうした説明を試みてみたい。

「觀叔祖少卿奕棋」 「叔祖少卿の奕棋を觀る」

世上滔滔聲利間 世上 滔滔たり 声利の間

獨憑棋局老青山 独り棋局に憑り 青山に老ゆ

心遊萬里不知遠 心 万里に遊び 遠きを知らず

身與一山相對閑 身は 一山と相對して閑なり

夜半解圍燈寂寞 夜半 囲みを解き 燈 寂寞

樽前翻却酒珊瑚 樽前 翻却し 酒 珊瑚

因觀勝負無常在 勝負の常に在る無きを觀るに因る

生死□□□不關 生死 □□□ 関せず

「叔祖少卿の奕棋を觀て」

世の中は 滔々と流れ止まず

名声 利益の間にうごめくもの

けれど ぼくの叔祖は

それに背を向け 碁盤相手に

山の中で 齡を重ねきた

心は 万里の果てまで遊ぶ

どこまで遠いか 分からぬよ

身は 山とともにあり

じつと向き合い もの静か

深夜 やつと囲みを解けば

灯火は もの寂しげ

お酒を前にするや

さつさと盤から引き上げて

そして 飲む酒は

これは美玉のような味わい

勝った負けたは 常無きもの

されば この世の生死も

□□□ 知ったこつちやない

〔叢書「外集補」卷四、庫本『外集』卷十四、『全集』第三册「外集」卷十八、『全宋詩』卷一〇二一 黄庭堅卷四三〕

＊叢書「外集補」卷四、所収の作。「外集補」に元々注がないので、以下補う。

○叔祖少卿―叔祖は祖父の兄弟。つまり祖父黄湜の兄弟。湜は淳、字は元之（茂倫とも記される）。太常少卿に終わった。宝元元年の進士。黄筥『山谷年譜』には、この頃、黄庭堅は一族で郷里（洪州分寧県）にあったのだらうと、記す（此の詩は蓋し是れ聚族にて郷に居る日 先生の作りし所なり）。○奕棋―囲碁。杜甫「秋興八首」其四「聞道

く長安 弈棋に似たりと／百年世事 悲しみに勝えず

(『杜詩詳注』卷十七) が有名だが、吳融「禪院の弈棋偶題」の、「尋ね知る 世界都て夢の如きを／自ら喜ぶ 身心の甚だ忙しからざるを」(尋知世界都如夢／自喜身心甚不

忙 『全唐詩』卷六八六)、貫休「韋相公の寄せらるるに酬ゆ」の、「秦客 弈棋 抛つこと已に久しく：／万般

幻の如くにして 先覚を希む」(秦客弈某抛已久／：万般如幻希先覚 『全唐詩』卷八三五) 等の詩境に近い。なお

「奕」は別字だが、誤って通用。○滔滔―流れて行く様。王安石「雜詠三首」其一(『臨川先生文集』卷六 古詩)

に、「死を哭するは 生が為に非ず／吾が心 良に欺かざればなり／滔滔たり 声利の間／絳灌(周 勃や灌嬰のこ

と) 亦た何ぞ知らんや」(滔滔声利間／絳灌亦何知 制作年不詳)と同一句がある。なお梅堯臣・蘇舜欽・歐陽修・

王禹偁・蘇軾にも「声利」表現があるが、「滔滔声利間」というのではない。従来指摘がないが、黄庭堅が王安石に学

んだ一例か。ちなみに黄庭堅は王安石とも遠戚関係になる。すなわち、岳父謝景初の姉妹が王安石の弟・王安礼(和甫)

に嫁している。○解困―碁盤の陣囲みを解くこと。○翻却―酒を前に碁からばつと切り替えること。戦場からの撤退に喩えている。○珊瑚―美玉。

*七律、韻：間・山・閑・珊・閑

宋・黄芚 『山谷年譜』、鄭永暁 『黄庭堅年譜新編』

では、治平三(一〇六五)年、二二歳の時に配するが、「外集補」卷四の題下原注では「治平二年作」と記す。

ただしこの注記は内閣文庫市橋本にはなし。この頃より黄庭堅の詩作が増えてくる。

叔祖黄淳の清貧な生き方に心を惹かれていた。碁に夢中になつていた人間が、酒が出た途端さつと碁盤から

離れるあたりに、名利の世界を離れ飄々として生きる様が活写される。叔祖の盤上を見ていると、黄庭堅にはそ

れが脱俗の場であるに止まらず、脱生死境の隱喩ともなっている。黄庭堅が叔祖を慕つた一端が伺える。また山谷詩の一特色たる日常生活詠を基にした人生詠の含義的

指向が、早くも現れていて興味深い。□□□にどんな文字があつたのか、気になるところ。黄淳を詠んだ詩は、

この一首のみ。

二 叔父台源先生への崇敬の念

続いて、叔父の台源先生こと、黄襄（字は聖謨）を詠んだ詩。黄襄は、父・庶の弟。治平三年、山谷はこの台源についてまとまった数の作品を書いている。が、紙数の関係で二回に分けて取り上げる。従来、黄襄論についての報告はごく断片的なもののみで、まとまったものは確認されない【③】。

「次韻十九叔父台源」 「十九叔父台源に次韻す」

聞道臺源境

きくなら
聞道く
台源の境

鉏荒三徑通

こわ
荒を鉏す
三徑通ると

人曾夢蟻穴

ひと
曾て蟻穴を夢み

鶴亦怕雞籠

つる
亦 鶏籠を怕る

萬壑秋聲別

ばんがく
萬壑 秋声 別なるも

千江月體同

せんこう
千江 月体 同じ

須知有一路

すべか
須らく知るべし 一路有るも

不在白雲中

はくうん
白雲の中に在らざるを

「十 九叔父台源に次韻して

お聴きするに 叔父上の心境は
荒れ草を鋤いて 小徑を三本通し
世と隔たった 隠者そのもの

昔 ある人 夢の中の蟻の国へ
行つた話が あつたつけ

鶴もまた 籠の中の鶏のように
閉じこめられるを 恐れるもの

（叔父上は 心底願う
世俗から 自由たらんと）

幾万の谷を訪れる 秋の声よ
存在の分だけ 異なるも
幾千の川面に映る月影は
どれも みな同じ

叔父上の 真実一路の道

知るべきはそれはかの

白雲の中にはないってこと

(叢書「外集詩注」巻一、庫本『外集』巻七、『全集』第二冊「外集」巻八、『全宋詩』巻九九九 黃庭堅二二)

本詩には史容の注があり、*の記号を付す(以下、同じ)。その他は拙論の増注である。その前に、こやうじょう黄襄について見ておく。その最も詳しい資料は、「叔父十九先生の祭文」(『黃庭堅全集』「別集」巻十三)である。今、全文を段落ごとに分けて掲げる。

嗚呼、叔父は孝恭・慈仁にして、以て郷官の化を助くるに足り、明哲・淑慎にして、以て大雅の風を追ふに足る。教術は天地を窮め、而して万物の宗を談ず。学問は古今を貫き、百慮の致に參ず。先生は既に世に求むる無く、世も亦た先生に求むる無し。所

以に詩書に耄老し、丘壑に陸沈すれば、功烈述ぶる無く、文章昭らかならず。豈に悲しからず哉。

(嗚呼、叔父孝恭慈仁、足以助郷官之化、明哲淑慎、足以学問貫古今、而參百慮之致。先生既無求於世、世亦無求於先生。所以耄老詩書、陸沈丘壑、功烈無述、文章不昭。豈不悲哉)

昔 田里に在りしとき、(自分は叔父に)侍坐・従行し、飽くまで金玉の音を聞き、まじ実に芝蘭の室に入れり。(叔父の)清規 俗に映ずるも、孰んぞ能くりんし磷淄(俗にすり減らされ黒く染められる)せられん。和氣 格人(立派な人格者)にして、声色を以てせず。(郷村の人々は)子弟の過は、郷評を畏れざるも、先生の耳に達するを恐る。邑里の訟は、公府に之かずして、先生の庭に直する(解決にあたる)を求む。維れ先生 匿智・韜光(隠れた知恵や仁徳)もて、すなわ就ち陰かに息迹(収拾)す。惕畏(恐れること)なること(墨子におけるように)馬を数へるに幾く、清慎なること(後漢・楊震の)金を辞するよりも過ぎたり。賢を見(その人物と)斉ひとしきを思ふこと、将に及ばざらんが如し。人の過を

聞くも、黙して之を識るのみ。

（昔在田里、侍坐從行、飽聞金玉之音、突入芝蘭之室。清規映俗、孰能磷淄、和氣格人、不以声色。子弟之過、不畏鄉評、而恐達先生之耳。邑里之訟、不之公府、而求直先生之庭。維先生匿智韜光、就陰息迹。惕畏幾於數馬、清慎過於辭金。見賢思齊、如將弗及、聞人之過、默而識之）

なお『墨子』「經說下」に、「牛と數へ馬と數ふれば、則ち牛馬は二なり。牛馬と數ふれば、則ち牛馬は一なり」
（數牛數馬、則牛馬二。數牛馬、則牛馬一）という。また『後漢書』楊震伝には、王密が「夜に至り金十斤を懐き以て震に遺らん」（至夜懷金十斤以遺震）とすると、これを「天知る、神知る、我知る、子知。何ぞ知る無し」と謂はんや（天知、神知、我知、子知。何謂無知）と誠めた故事がある。

故に上下の交りを能くし、織介（わすか）も悔ゆる無し。耆艾の歳（五六十歳）には、宴安（えんあん）くつろぐ様）として閑に就き、功を（林壑や）巖穴の間に致して、復た経綸の夢をなさず。謂へらく、当に百歳

を康強として、我が後生を保つべしと。この禍凶を凶らざりき、日月は遄かに尽く。誨言（教えの言葉）耳に在り。叔父よ 何こにか之ける。酒を酌み觴を盈たし、平生の笑語を見ず。實泣（号泣する意）して地に伏すも、豈に其れ黄壤（黄泉の叔父）の聴聞せん。哀しい哉、奈何せん。尚饗（こひ願はくは享けよ）。

（故能上下之交、織介無悔。耆艾之歳、宴安就閑、致功巖穴之間、不復経綸之夢。謂当康強百歳、保我後生。不凶禍凶、日月遄尽。誨言在耳、叔父何之。酌酒盈觴、不見平生之笑語。實泣伏地、豈其黄壤之聴聞。哀哉奈何。尚饗）

黄庭堅の崇敬ぶりがうかがえる。「次韻十九叔父臺源」の語注は以下の通り。

○鋤荒—「鋤荒」に同じ。*杜甫の「秋野五首」其一（『杜詩詳注』卷二〇）に、「棗熟して 人の打つに従せ／葵荒れて 自ら鋤かんと欲す」（棗熟従人打／葵荒欲自鋤）とある。この種の語を好んだことは、次詩の注を参照。

○三徑—陶淵明「歸去來辭」に、「三徑就荒、松菊猶存」

(三径 荒に就き、松菊 猶ほ存す)。○蟻穴―史容注に

「詳見後宿觀音院詩注。用異聞集。淳于禁夢入槐安国」(「詳しくは後の「觀音院に宿る詩」注を見よ。異聞集を用ゆ。

淳于禁 夢に槐安国に入る)とあり。『後集』卷十一「庚

申宿觀音院」(庚申 觀音院に宿す) 詩を指す。夢で蟻穴に入つた話は、*「異聞集」(『太平広記』卷四七五「淳

于禁」は、末尾に出典を「出異聞録」と記すが、曾慥(?

一一六四) 編『類説』卷二八は「異聞集」とする。史容、何に拠つたか、待考) のほか、晋・干宝『捜神記』卷十

には簡単な記録が見られ、さらに唐・李公佐「南柯太守伝」

がよく知られる。淳于禁が槐樹の下で酔い夢を見、槐安国

という所に行き、国王に招かれ南柯太守を務めること、三

十年。富貴と栄華を尽くしたが、酔いから醒めてみると、

槐樹の下と南の枝の所に蟻の穴があつたという話。人生は

夢のごとく、富貴得失は常なしの喩。黄庭堅、この故事を

しばしば用いる。『内集』卷一「子瞻の王定国に贈るに次

韻す」(次韻子瞻贈王定国) の任淵注には、「異聞集載南柯

太守淳于禁事云」(異聞集に南柯太守・淳于禁の事を載せ

て云はく) と、この故事を引いた後で、「山谷、喜んで此

の事を用ゆ」(山谷喜用此事) と記す。○鷄籠―籠の中

のニワトリ。窮屈な生き方の比喩。史容注*「晋の嵇紹

の鶴処鷄群の意を用ゆ」(用晋嵇紹鶴処鷄群之意)。『晋書』

卷八十九嵇紹伝、「紹、始めて入洛す。或るひと王戎に謂

ひて曰はく、(昨、稠人(多くの人) の中に於いて始め

て嵇紹を見るに、昂昂然として野鶴の鷄群に在るが若し)

と」(紹始入洛。或謂王戎曰、昨於稠人中始見嵇紹、昂昂

然如野鶴之在鷄群) を指す。なお『北堂書鈔』卷五七・設

官部「嵇紹有文才」、『太平御覽』卷四四六・人事部「品藻

中」、及び卷九一六・羽族部「鶴」にも、この箇所を引く。

潘自牧撰『記纂淵海』卷九一七・禽部「鶴」には、簡単に

「史、嵇紹 昂昂然として、野鶴の鷄群に在るが若し」(史、

嵇紹昂昂然、若野鶴之在鷄群) とのみ引く。史容またいわ

く、*李白「送趙四序」「趙少翁亦鷄棲鶴籠／不足以窘束

鷺鳳耳」。これは、「春、姑熟に於いて趙四の炎方(暑い

地方) に流さるるを送るの序」(春於姑熟送趙四流炎方序)

の「趙少翁、才貌は瓌雅(傑出してゐる様) にして、志気

は豪烈、黄綬を以て尉となり、当塗に泥蟠す(不遇をか

こつ)。亦た鷄棲・鶴籠(狭い所に閉じ込める) せしも／

以て鷺鳳を窘束(拘束) するに足らざるのみ」(趙少翁才

貌瓌雅、志気豪烈、以黄綬作尉、泥蟠当塗。亦鷄棲鶴籠／

不足以窘束鷺鳳耳) を節録したもの。叔父はもとより「鶴」

のごとき脱俗の人柄だが、それゆえに世俗に縛られるのを

とても厭う意。これほど徹底した叔父の脱俗への思いに、
黄庭堅は心惹かれるものがあつた。

ここで、「千江月体同」について少し取り上げてみた。
史容は*『心珠道場儀』『千江同一月／万戸尽皆春』
を掲げるが、確認できなかった。それよりもほぼ同文の
例が、北宋・道原『景德伝燈録』巻二十「前青林師虔禪
師 洞山第三世住 法嗣—韶州龍光和尚」に見い出せる
ことの方が重要である。すなわち、「問ふ、〈賓頭盧の
一身、甚麼と為てか四天下の供に赴く〉と。師曰はく〈千
江 共に一月／万戸 尽く春に逢ふ〉と」（問賓頭盧一
身、為什麼赴四天供。師曰、千江同一月／万戸尽逢春—
僧が問うに、十六羅漢の一人の賓頭盧は身は一つしかな
いののに、どうやって下界の四天下に行き、（大勢の衆生
のために）供物を施せるのですかと。師は答えた。「幾
千の江に浮かぶ月は一つ／どの家もすべて春に会うのじ
やよ」と。賓頭盧の体は一つなのに、どうして下界の
たくさんの方の衆生に贈り物を届けられるのかという問いに
対して、師は真理の普遍なるを説くのである。同種の話
で古いのは、盛中唐のかの澄観『大方広仏華嚴経疏』巻
五、及び五代—北宋・永明延寿の『宗鏡録』巻十二等に、

「若し月 百川に入るも、影の月を尋ぬるに、月体は分
かたず（百には分かれず一つの月のままである）」（若月
入百川。尋影之月、月体不分）等とある。

黄庭堅はこれらの『華嚴経』『景德伝燈録』を、いつ
の時点から閲読したか確認できないが、その他の禅書
（『楞嚴経』『圓覚経』等）も含めてかなり渉獵してい
る。ちなみに、北宋朝の認可を得て刊行された『景德伝
燈録』の場合、史容が山谷詩との関連を指摘する例は相
当数に上るが、今、早いものから順に三首掲げると、

熙寧元年「何造誠作浩然堂」二十四歳、『楞嚴経』
『華嚴経』との関連もあり。

同 「次韻戲答彦和」『維摩詰経』との関連

もあり。

熙寧四年「謝曉純送衲靴」二十七歳、『楞嚴経』
との関連もあり。

である。しかし、じつはこれよりも前に『景德伝燈録』
との関連を指摘できるのであり、黄庭堅がこの頃には禅
に関心を寄せていたことを示す。このことは、黄庭堅の
より早年の諸作の段階から、禅的世界を前提にした読解
がなされるべきことを意味する。その具体的な実践を後
掲の山谷「詠罵遷谷」詩等の幾首かで試みてみたい。従

来、本詩をこのような視点で取り上げた例はほとんどない。

周知のように、郷里の洪州は馬祖道一が道場を構えた地で、以来、禅宗の拠点となっていたから、山谷はかなり自然な環境で触れていたと考えられる。叔父台源の理想とした「一路」は、洪州禅の盛んなこの地でその道に心を寄せていくことだった。若い黄庭堅の心を捉えた禅話が、「千江月体同」だったことは興味深い。ちなみに、同類の詩句は、「答余洪範二首」其一にも「道在東西祖／詩如大小山／一家同雪月／万事廢機関」とある。これについて、史容注は第一句に「伝燈録」を、第四句に「即龍光和尚千江同一月之意」を引く。これは元豊五年、三十八歳の詩である。

さて、王安石晩年の記夢「詩（『臨川先生文集』卷二十九）も、同種の話を踏まえたのだろう。「月は千江に入るも 体分（た）かたず／道人復た世間の人に非ず」（月入千江体不分／道人非復世間人）という。第六句は、王安石の詩句と発想は同一だが、上句に「万壑（ばんがく）秋声（しゅうせい） 別（べつ）なるも」があることで、秋景の多様さの中に宿る一個の真実を深く捉えている。以下、語注の続き。

○白雲―仙人の住む世界。「白雲の中には在らず」というのは、叔父の理想郷（これを「台源境」と表現）は、仙人の世界をめざすものではないの意。むしろ、それは真如の世界にあるのだという。

*五律、韻：通・籠・同・中

三 叔父台源の脱俗―愛鶯家と欧梅詩

治平三年は、叔父台源に関する作品が多く作られた時である。以下、詳しく見ていこう。まずは次の詩から（叢書本、黄鶯「年譜」、鄭「年譜新編」ともに治平三年とし、『全集』第二冊「外集」卷三のみ治平二年とす。その理由は掲げられず。今、前者に従う）

「次韻叔父聖謨詠鶯遷谷」「叔父聖謨の（鶯の谷を遷るを詠む）に次韻す」

鴉舅（あきゆう）頗強（ひんきやう）聒（かく）にして

僕姑（ぼこ）嘗（かつ）勃（は）磔（は）す

黃鳥（こうちやう）懷（こ）好音（こうおん）を懷（いだ）き

秋菊染春衣	秋菊	春衣を染む
嚶嚶求朋友	嚶嚶として	朋友を求め
憂患同一枝	憂患	一枝を同じうす
提壺要酤我	提壺	我に酤ふを要む
杜宇賦式微	杜宇	式微を賦し
黃鳥在幽谷	黃鳥	幽谷に在り
韜光養羽儀	韜光	羽儀を養ふ
晴風曜桃李	晴風	桃李を曜かせば
言語自知時	言語	自ら知る時
先生丘中隱	先生	丘中に隠れ
喬木見雄雌	喬木	雄雌を見る
引子遷綠陰	子を引きて	綠陰を遷り
相戒防禍機	相戒めて	禍機を防げと
李杜死刀鋸	李杜	刀鋸に死し
陳張怨棄遺	陳張	棄遺を怨む
不如聽黃鳥	如かず	黃鳥を聴き
永晝客爭棋	永晝	客 棋を争ふに

カラスは
とても強弁家

ヤマバトは 闘士で名有り

けれど 春のウグイスは

よい音色で さえずるよ

(昔 黄鵠は その身を

菊の花で包んだことを 誇ったもの)

鶯もまた 身にまとう春着を

菊の花で 染めている

ホーホケキヨの さえずりは

友を呼ばれる サイン

一つの枝に 並ぶ姿は

苦楽を共にする 心

酒 買ってこいと

提壺(鵝)が 我に要求し

ホトトギスは

国の衰え 訴える

そんな中 ウグイスは

深い谷に 身をひそめ

おのが才能 現さず

立派な品格 養つて

晴れた空の下

春風が 桃李の花を輝かせば

ウグイスは ことばも

自然に 学ぶ頃

先生は 丘の中に隠れ

脱俗の高い木立を 仰ぎ

ウグイスの雌雄を見て 暮らす

子らの手を引き

その木陰を 移り歩き

誠めて こう言われる

世の危険に 関わるなど

李固・杜喬 はたまた 李膺・杜密

哀れ 凶刃に倒れ

陳餘 張耳は 刎頸の交わりの友なるに

その後 袂を分かち 敵となり

あげくに 友に捨てられたと恨み節

このウグイスの さえずりに

耳を澄ませ

この日長 お客と囲碁を打つ

これに勝るものなし

(叢書「外集詩注」巻一、宮内庁Ⅱ四部叢刊続編本

巻五、庫本『外集』巻三、『全集』第二冊「外集」

巻三、『全宋詩』巻九九九 黄庭堅一一)

まず語釈から掲げる。本詩は鳥類の披瀝であり、『爾雅』「積鳥」の応用の感がある。周知のように、黄庭堅にはかの「演雅」詩もあり、本詩はそれへと連なっていく作品といえる。

○鴉舅―*陸龜蒙「菜を挑る」(挑菜) 詩に、「行歌每依鴉舅影／挑頻時見鼠姑心」。この詩題、四庫全書『全唐詩』『松陵集』では、「偶たまたま野蔬やそを掇とり羹しゅう美び(皮日休)に寄せて作有り」(偶掇野蔬寄羹美有作)に作る。同『甫里集』には「有作」がない。「挑菜」とするのは、前掲の宋・曾慥編『類説』卷四十五・卷六十くらいしか見えぬ。ただ「挑菜詩」として引くものの、「行歌每依甥舅影／挑頻時見舅姑心」と文字が異なる。史容、何に拠ったか。待考。

―野の畑にはようやく柔らかな芽が伸びてきた。いつも舅や姑の小言が気になる(「行くも歌やむも毎つねに依る 鴉舅の影／挑とること頻りにして 時に見る鼠姑の心」)。風露おかして初めて籠を携え、野菜摘めばすがすがし。そのさっぱりした景色はわが家のような意。また*「按、本草、牡丹一名鼠姑。用之去心。以類推之、則鴉舅亦当是一種草木之名。山谷特借鴉舅字、以名鴉耳」。すなわち『本草』を按ずるに、牡丹は一に鼠姑と名づく。之を用ふれば心を去る。類を以て之を推すに、則ち鴉舅は亦また当まに是れ一種の草木の名なるべし。山谷、特に「鴉舅」の字を借りて、以て鴉に名づくるのみ」と。この『本草』は委細は不明だが、

宋・唐慎微撰『證類本草』(新修版は政和六年序 一一一六)等が出てはいる。史容『外集注』はそのおよそ百年後のもの。「本草、牡丹一名鼠姑。用之去心」と同内容の『本草』は、『證類本草』卷九「牡丹」に、「一名鼠姑、生巴郡山谷、及漢中。二月・八月、採根陰乾」(一名鼠姑、巴郡の山谷及び漢中に生ず。二月・八月に、根を採り陰乾す)とあり、その下に続く割注として「陶隱居云、「今東間亦有色赤者、為好用之去心。按、鼠婦亦名鼠姑。而此又同殆非其類。恐字誤」(陶隱居云はく、「今、東間にも亦た色の赤き者有り、為に好んで之を用ふれば心を去る。按ずるに、鼠婦そふも亦た鼠姑と名づく。而して此れ又同じなるも、殆んど其の類には非ず。恐らく字の誤まりならん」とある。ここで史容は本草の蘊蓄を披瀝するが、山谷の意図は「鴉舅」の字を借りて、以て鴉に名づくるのみ」にある。

陸龜蒙「鴉舅―鼠姑」の対句は、山谷詩の「鴉舅―僕姑」に字面上似るが、内容は「人」から「鳥」へ変化しており意味までの踏襲ではない。その対句の趣向の面白さのゆえに、山谷はこの陸詩を参考にしたのであろう。なお「鴉舅」は、『全唐詩』では陸詩のこの一例のみ。黃庭堅詩文集で

もこの一例のみ。ただ梅堯臣には類似の句が二例見られ、「州の河亭に宿り事を書す」（州河亭書事／『宛陵先生集』卷五）に、「林中の鷓鴣は瘳瘳／席上の蠅虎は攫む」（林中鷓鴣瘳瘳／席上蠅虎攫）。「朝二首」其二（同卷四三）に、「青苔の井畔に 雀兒闘ひ／烏臼（ハゼ）の樹頭に 鷓鴣鳴く」（青苔井畔雀兒闘／烏臼樹頭鷓鴣鳴）とある。黃庭堅はかなり多くを梅堯臣詩に学んでいるが、これもその一例か。○強聒——『莊子』「天下篇」に、宋鉞・尹文は：（無抵抗・反戦論を）もつて「天下に周行し、上に説き下に教へ、天下取らずと雖も、「強聒（声を大）にして舎（止）めざる者なり」（宋鉞尹文：周行天下、上説下教、雖天下不取、強聒而不舎者也）という。○僕姑——歐陽修詩云、「病識陰晴似勃姑」。「聖俞の春雨に和す」詩に、「簷瓦蕭蕭として 雨勢疎に／寂寥として 官舎 君と俱にす／身は鎖閉に遭ひて 鸚鵡の如く／病みて陰晴を識るは 鶉鳩に似たり」（「和聖俞春雨」詩、「簷瓦蕭蕭雨勢疎／寂寥官舎与君俱／身遭鎖閉如鸚鵡／病識陰晴似鶉鳩／『歐陽文忠公集』卷十二 嘉祐二年 一〇五七の作）。*又云、「天雨止、鳩呼婦還鳴且喜」。「鳴鳩——崇政殿後考試所作」詩

（『同』卷八 嘉祐四年の作）に、「天將に陰り／鳴鳩 婦を逐ひて中林に鳴く／鳩婦 怒啼して 好音無し／天雨止み／鳩 婦を呼び婦し 鳴き且つ喜ぶ」（天將陰／鳴鳩逐婦鳴中林／鳩婦怒啼無好音／天雨止／鳩呼婦鳴且喜）という。いずれも黃庭堅の本詩より少し前の作。若い頃から黃庭堅は歐陽修に学んでいたが、この史容注はその一事例をなすか。*「勃姑、僕姑は皆鳩なり」。*米元章『畫史』「又稱勃鳩」。その原文は「薛紹彭・道祖に、花下の一金盆、盆の 旁に鶉鳩有り。之を金盆鶉鳩と謂ふ。豈に是れ名画ならんや、笑ふべし」（薛紹彭道祖有花下一金盆、盆旁鶉鳩。謂之金盆鶉鳩。豈是名画、可笑）。別名「鶉鳩」ということを示すだけの文章だが、米元章（芾）は王安石・蘇軾も好んだ文人だったこともあつてか、史容、彼等の繋がりを感じつつここに引用したか。*『莊子』「外物篇」に曰はく、「室に空虚無ければ、則ち婦姑 勃谿せん」（室無空虚、則婦姑勃谿）と。「勃谿」は所を争う意。○黄鳥——*詩「黄鳥于飛」注搏黍也。『詩経』周南・葛覃に「黄鳥 于に飛び／灌木に集まる／其の鳴くこと 啾啾たり」。注は搏黍なり（「黄鳥于飛、集于灌木、其鳴啾啾」

注搏黍也)。*陸璣の疏に云はく、「黃鳥は黃鸝留なり。或いは之を黃栗留と謂ふ。幽州の人 之を黃鶯と謂ふ、一名倉庚、一名商庚、一名鷺黃、一名楚雀、齊人之搏黍と謂ふ」(黃鳥、黃鸝留也。或謂之黃栗留。幽州人謂之黃鶯、一名倉庚、一名商庚、一名鷺黃、一名楚雀、齊人謂之搏黍。) *郝国風の凱風に云はく、「睨皖(朗らかでよい声の様)たる黃鳥は／載ち其の音を好くす」(郝国風凱風云、睨皖黃鳥／載好其音)。*陳国風の匪風に云はく、「之に好音を懷らん」(陳国風匪風云、「誰將西帰／懷之好音)。上句は「誰か將に西に帰らんとす」。原文は「陳」とするが、「檜」の誤り。中華書局本・上海古籍本、ともに注に指摘す。

ここまで詩語を検証する中で、欧陽修(「和聖俞春雨」「鳴鳩―崇政殿後考試所作」)・梅堯臣(「州河亭書事」「朝二首」)と何度か関連したが、じつは以下の詩語を丁寧調べていくと、さらに欧梅との深い関連が思われ始める。

まず「杜宇」は、*梅聖俞(堯臣)「四禽言―子規」に、

「歸去するに如かず／春山 云に暮る」(不如歸去／春山云暮)。景祐四年(一〇三七)作という。「提壺」も、*同「四禽言―提壺」中の句で云はく、「壺蘆を提げ／美酒を沽へ」(提壺蘆／沽美酒)。また梅堯臣「提壺鳥」(景祐二年 一〇三七)には、「上に言ふ 壺を提げよと勧め／下に言ふ 酒を酤へよと勧め」(上言勸提壺／下言勸酤酒)。同「和永叔六編―啼鳥」(嘉祐四年 一〇五九)にも、「提壺蘆／提壺蘆／爾莫勸翁沽美酒／公多金錢賜醇酎／名声圧時為不朽」(壺蘆を提げ／壺蘆を提げよ／爾 勸むる莫れ 翁に美酒を沽へと／公 金錢多けれども 醇酎賜はる／名声 時を圧し 不朽為り)とある。その欧陽修「啼鳥」(同年)は、「提壺蘆／提壺蘆／不用沽美酒」。また同題の別詩で「独り花上に提壺蘆有り／我に勸む 酒を沽ひ 花前に傾けよと」(独有花上提壺蘆／勸我沽酒花前傾) もある。

「黃鳥」(高麗ウグイス)は史容注にないが、愛すべき声を詠んだ例を続けて欧梅詩との関連に即して二首掲げる。梅堯臣「聞鶯」(至和二年 一〇五五)に、「最好の聴／歌を調でるに似て 舌 更に

叮嚀／高枝より抛過し 低枝に立つ／金の羽に眉脩く
墨染の翎（最好声音最好聽／似調歌舌更叮嚀／高枝抛
過低枝立／金羽眉脩墨染翎）。眉というのは、嘴の付け
根部分から眼を通り後頭部へ横切る黒い眼過線。全体は
黄色の羽毛だが、翼は黒色。梅堯臣の「鶯」礼讚詩であ
る。歐陽修「古詩三十一首——啼鳥」（慶曆六年 一〇四
六／黃庭堅二歳）にも、「日暖かく 衆鳥 皆 嚶鳴す
／…南窓 睡多く 春 正に美なり／百舌は未だ曉なら
ざるに 天明を催し／黃鸝 顔色 已に愛すべく／舌端
唾咤として嬌嬰の如し／竹林は静かに 青き竹笋に
啼く／深処に見えず 惟だ声を聞くのみ」（日暖衆鳥皆
嚶鳴／…南窓睡多春正美／百舌未曉催天明／黃鸝顔色已
可愛／舌端唾咤如嬌嬰／竹林静啼青竹笋／深処不見惟聞
声」という。欧梅の愛鳥詠の往来からは、無欲恬淡にし
て風雅な交わりを喜びとする士大夫の審美観がうかがえ
る。それはそのまま台源——山谷の間柄の希求する美学で
もあつたと思われる。ただそれに止まらず、その美的本
質とは何かという更なる問いも湧いてくる。それも日常
生活の中の小さな喜びの感得や感興、また『爾雅』「積

鳥」や類書鳥部といった括り方の美ではなく、この台源
——山谷に即した彼等の根源的な美意識にふみこんだ、そ
れは何かである。

己が道に「一路」に生きる彼等が、「鴉舅——僕姑——黃
鳥——提壺——杜宇——黃鳥——黃鳥」の鳥部の転語に、どんな
思いを寄せていたのか。これが単なる知的遊戯でないこ
とは明白である。叔父台源の思想から考えるべきは、前
述の禅の美学である。たとえば、『景德伝燈録』に、こ
のような記述がある。

卷三「在眼曰見、在耳曰聞、在鼻弁香、在口談論、在
手執捉、在足運奔」

卷二十八「心法無形、通貫十方。在眼曰見、在耳曰聞、
在手執捉、在足運奔。心若不在、随处解脱」

つまり「心」というものは形がないからこそ、広い世界
を貫くことができる。眼ではものが見え、鼻では香がか
げ、口ではものを話すことができ、手ではものをつかむ
ことができ、足では体を運ぶことができる。もともと心

が無であるからこそ、どこでも自由なのだ」というのである。原話は、馬祖の後継者・臨済の語録『臨済録』中にある。即ち、見たたり聞いたりという普通の暮らしの中の行動に、仏性の働きのものを見出すという考え方であり、これが馬祖以後の禅の大きな特色となっている。この種の日常性の中の仏性の顕現を、馬祖道一の道場の地の台原や山谷が理解していたと推測するのは、そう無理なことではあるまい。これに留意するならば、「鴉舅―僕姑―黄鳥―提壺―杜宇―黄鳥―黄鳥」という、「黄鳥」の三度のリフレンは、〈欧梅の愛鶯詠〉のごとき審美眼を、禅風に「形なき心の自由」として反復する表現と解しうる。

以下、その他の語注を掲げる。

「子規、一名は杜鵑」。（揚雄）「蜀王本紀」、「杜宇為望帝、亡去、化為此鳥」（杜宇為望帝、亡去、化為此鳥）。

史容、掲げないが、宋・李昉『太平御覽』卷一六六「州郡部―劍南道」に、「揚雄・蜀王本紀に曰はく、杜宇…乃ち自ら立ちて蜀王と為し、号して望帝と曰ふ。…時に荆地に

一死者有り、鼈べつれい靈と名づく。其の尸亡びて汶山びんに至り、却つて是れ更生し、望帝まみに見ゆ。以て蜀相と為す。時に巫山・蜀地の雍江ようこう 洪水たり。望帝 鼈靈をして巫山を鑿うがち水を治めしめて、功有り。望帝 自ら徳の薄きを以て、乃ち国を鼈靈に委ぬ。号して開明と曰ふ。遂に自ら亡去して、化して子規と為る。故に蜀人 鳴くを聞けば曰はく、「我が望帝なり」と」（揚雄・蜀王本紀曰、杜宇…乃自立為蜀王号曰望帝。…時有荆地有一死者、名鼈靈。其尸亡至汶山、却是更生、見望帝。以為蜀相。時巫山蜀地雍江洪水。望帝使鼈靈鑿巫山治水、有功。望帝自以德薄、乃委国於鼈靈。号曰開明。遂自亡去、化為子規。故蜀人聞鳴曰、我望帝也）。史容の依拠本か、待考。*（前掲）伐木に云はく、「酒有れば 我に（来りてともに） 滑じよし（酒を漉す意）/酒無ければ 我に（来りてともに） 沽こさん（一夜造りの酒を酌む意）」（有酒滑我/無酒沽我）。*衛えい国風、「式しきて微びなり（有酒滑我/胡なんぞ帰らざる）（式微式微/胡不暵）。原文に「衛風」とするのは、邶風の誤り。この点、中華書局本の注には指摘があるが、上海古籍本はなし。両者の違いの一例。将来、補正版が待たれる。○秋菊―*晋・葛洪

『西漢雜記』卷一「黃鵠 太液池上に下り、為に歌ひて曰はく、(黄鵠飛びて建章に下り/金もて衣と為し 菊もて裳と為す)。(黄鵠下太液池上、為歌曰、(黄鵠飛兮下建章/金為衣兮菊為裳)」。*太白「大鵬賦」。「豈比夫蓬萊之黃鵠/誇金衣与菊裳」。李白の知られた賦で、「豈に比せんや夫の蓬萊の黄鵠の/金衣と菊裳とを誇るに」。○嚶嚶——*『詩』「小雅」鹿鳴之什・伐木に、「木を伐ること 丁丁たり/鳥鳴くこと 嚶嚶たり」(伐木丁丁/鳥鳴嚶嚶)。*又(「伐木」)曰、「嚶として其れ鳴く/其の友を求むる声あり」(嚶其鳴矣/求其友声)。○二枝——*『莊子』逍遙篇、「鷓鴣 深林に巢くふも、一枝に過ぎず」(鷓鴣巢於深林、不過一枝)。○羽儀——*嵇康「靈鳳振羽儀」。中華書局・上海古籍本ともに注記しないが、正しくは梁・江淹の「雜体三十首」其八「中散の言志」で、その下旬(取景西海浜)も含めていうと、「靈鳳 羽儀を振るひ/景(姿)を西海の浜(西の仙境)に戦む(憩わせる)」。『文選』卷三十一所収。*『易』(漸)に曰はく「鴻 陸(遠——大空の意)に漸む、其の羽 用つて儀と為すべし」(鴻漸于陸(遠)、其羽可用為儀)。○囉桃李——*韓愈「盧仝(盧全)に寄せ

る詩」に云はく、「羊を買ひ酒を沽ふて(我が)不敏を謝す/偶たま明月の桃李に囉くに逢ふ」(韓退之「寄盧仝詩」云、「買羊沽酒謝不敏/偶逢明月囉桃李」)。○禍機——*『文選』卷二十八「樂府」、鮑照「苦熱行」に、「生軀(生身の体で) 死地を踏み/昌志(壯心を持ちながら)禍機(災難の発端)に登る」(鮑明遠「生軀踏死地/昌志登禍機」)。*李善注引『莊子』(齊物論)に曰はく、「其の発つこと機括の如し」(其発若機括)。*(続けて)司馬彪曰はく、「禍敗の来たるや、機括の発つが若し」(禍敗之来、若機括之発)。中華書局・上海古籍本ともに注記しないが、原本の「括」は「栝」の誤り。『莊子』『文選』ともに「栝」。*班固『漢書』述曰、「禍如発機」。『漢書』述伝七十下「爰盜朝錯伝」に、「錯 之れ材瑣さく 智小にして謀大、禍は機を発つが如く、寇に先んじて後に害さる」(錯之瑣材、智小謀大、禍如発機、先寇後害)。○李杜——*『後漢』李固・杜喬皆為梁冀所害、死獄中。李膺杜密死於党錮、時人亦称李杜焉。同一の記述なし。これは史容が、以下のような二種の「李杜」の記述を要約して述べたもの。(一)『後漢書』李杜列伝に李固・杜喬らの詳しい

記述があるが、史容の右文そのものはなし。むしろ同書の以下の箇所が簡潔によく似る。桓帝紀「前太尉李固・杜喬、皆下獄死」（書き下し文略）。同・天文志中「太尉杜喬、及び故太尉李固、梁冀りようきの陥入せし所と為り、文書に坐して死す。」（太尉杜喬、及故太尉李固、為梁冀所陥入、坐文書死」。同・五行志二「桓帝建和二年五月癸丑、北宮の掖庭中の徳陽殿の火、左掖門に及ぶ。是に先んじ梁太后の兄冀きようかん挾きようかん姦かん（姦人を味方に）して枉わう（邪な政治を）し、故太尉李固・杜喬の正直なるを以て、其の事を害ふを恐れ、人をして固喬を誣ぶそ奏そうせしめて之を誅滅す。是の後 梁太后崩じ、而して梁氏誅滅す」（年号略／北宮掖庭中徳陽殿火、及左掖門。先是梁太后兄冀挾姦枉、以故太尉李固・杜喬正直、恐害其事、令人誣奏固喬而誅滅之。是後梁太后崩、而梁氏注滅）。同「是の時 梁太后摂政し、兄梁冀 専權し、漢の良臣 故太尉李固・杜喬を枉す。天下 之を冤ぬれぎなとす。其の後 梁氏誅滅さる」（是時梁太后摂政、兄梁冀専權、枉漢良臣故太尉李固・杜喬、天下冤之。其後梁氏誅滅）。同三「桓帝建和二年七月、京師大水。去年冬、梁冀枉殺故太尉李固・杜喬」（書き下し文略）等。(二)『後漢書』党錮列

伝（李膺条）「朝廷日乱、綱紀隳弛、膺独持風采、以声名自高。…後張儉事起、收捕鉤党。…乃詣詔獄、考死」。同（杜密条）、「後に桓帝より尚書令を徵拜し、河南尹に遷り、太僕に転ず。党の事 既に起こり、免ぜられて本郡に帰り、李膺と坐を俱にして、名行（立派な治績）相次ぐ。故に時人 亦た李杜と称す。後に太傅・陳蕃 輔政するや、復た太僕と為る。明年、党の事に坐しめ徴され、自殺す」（後桓帝徵拜尚書令、遷河南尹、転太僕。党事既起、免帰本郡、与李膺俱坐、而名行相次。故時人亦称李杜焉。後太傅陳蕃輔政、復為太僕。明年、坐党事被徴、自殺）等の部分の節録。○陳張―『漢書』本伝「張耳・陳餘、相与ともに刎頸の交はりを為すも、後に隙有り。餘 趙に相たれば、漢耳と韓信とを遣はし趙を破り、餘を斬る。詩「将安将楽、棄予如遺」。張耳・陳餘相与為刎頸交、後有隙、餘相趙、漢遣耳与韓信破趙、斬餘。詩、「将安将楽／棄予如遺」）。『漢書』本伝「陳餘、亦た大梁の人にして、儒術を好む。趙の苦陘こけいに遊び、富人の公乘氏 其の女を以て之に妻めあわす。餘 年少のとき、耳に父事し、相与に刎頸の交はりを為す。」（陳餘、亦大梁人、好儒術。遊趙苦陘、富人公乘氏以其女

妻之。餘年少、父事耳、相与為刎頸交)。章邯率いる秦の大軍が趙に迫ってくる中、陳余が救援を求めて趙を離れた後、秦軍が到着。張耳・趙王のこもる鉅鹿城を取り囲んだ。張耳も諸国や陳余に緊急救援を依頼。鉅鹿には諸国の軍勢が集まり、陳余も戻って来たが、秦軍に威圧され傍観して動かない。あわば討死寸前のところで項羽の楚軍が到着、

秦軍を撃破。張耳らは危機一髪、難を逃れることができたが、張耳は陳余が見殺しにしようとしたと疑い、二人の間には「由此有隙」。その後、両者は刃を交えることとなり、陳余は趙王を支える側に、また張耳は漢王に仕える立場にやがて両国は対立、「漢 耳と韓信とを遣はし趙の井陘に撃破し、餘を泚水の上に斬る」(漢遣耳与韓信撃破趙井陘、斬餘泚水上)。史容、以上を節録す。最後の史容注「詩」とは、『詩経』小雅・谷風之什(谷風)の、「將た安んじ將た樂しめば／予を棄つること遺るるが如し」。

この詩で注目されるのは、従来指摘がないが、「隱士」台源像の背後に、歐陽修・梅堯臣の風貌が意識されているのではないか、ということである。これについては、

黄庭堅の「次韻叔父台源歌」(叢書『外集補』卷一)「次韻和台源諸篇九首」(叢書『外集補』卷四)の自然詠十題詩において、より強い類似性が窺われる。後者の委細は紙数の関係で次稿に回すこととし、以下、前者のみを取り上げる。なお本詩に注はない(筆者の付したもの)。

四 台源先生の風貌―「黄叔度」及び欧梅風

「次韻叔父台源歌」 「叔父台源の歌に次韻す」

吾家叔度天與閑 吾家の叔度 天与の閑

晚喜著書如漆園 晩に喜ぶ 書を著すこと 漆園の如きを

臺平舊基水發源 台は旧基に平かに 水源より発し

但聞綜綜下林巒 但だ聞く 綜綜として 林巒を下るを

一朝斬木見萬象 一朝 木を斬れば 万象見ゆ

吞若雲夢胸中寬 吞むこと 雲夢の若く 胸中寛たり

漱滌泥沙出山骨 泥沙を漱滌し 山骨を出づ

混沌鑿竅物狀完 混沌 鑿竅さるるも 物狀完し

茶甘酒美汲雙井 茶甘く 酒美く 双井を汲み

魚肥稻香派百泉 魚肥え 稻香り 百泉派す

暑風披襟著茵菖

暑風 襟を披き 茵菖を著け

夜月洗耳聽潺湲

夜月 耳を洗ひ 潺湲たるを聴く

時從甥姪置樽俎

時に甥姪に従ひ 樽俎を置く

此地端正朝諸山

此の地 端正にして 諸山に朝す

除書謗書兩不到

除書 謗書 両つながら到らず

紫烟白雲深鎖關

紫烟 白雲 深く関を鎖す

郷人訟争請來決

郷人の訟争 來決するを請ひて

到門懷漸相與還

門に到るも 懷ふこと漸しにして

呼兒理琴蕩俗氣

兒を呼び 琴を理め 俗氣を蕩ひ

果在巢由季孟間

果して巢由と 季孟の間に在り

相与に還る

わが黄家の叔度たる 台源先生

天性の閑を得ておらる

年を経て ようやく著書をものされた

それは かの莊子の世界に通ずる書

台源先生の その由来―

古い地盤の上に 平らかにあり

かつ水が湧く源の意

周囲に 耳を澄ませば

水が太い束になって 滔々と

林や丘を 下る音のみ

ある朝 木を切り拓けば

一望のもと 万象が見えるよう

果てしない雲夢の沢を

呑み込むほどの 度量の大きさ

泥砂を 洗い流し

山の岩から 湧いて出る

かの混沌に 七つの穴あけたら

窒息して 死にたもう

けれど先生は 人間の姿をしても

平氣の平左

お茶は甘く お酒もうまく

地元の双井そうせいで 水を汲み

魚は丸々と太り 米は香ばしく

もろもろの泉が 流れ行く

熱風の吹く時は 襟元を広げ

ハスの花を 身につけて

月夜の美しい晩は 耳を洗い

せせらぎの音に 聞き入って

時には 若い甥や姪に付き合つて

ちよつとした 酒席設けてくれる

ここの土地柄は 端正で

周囲の山々に 向き合つて

この家には 任官書もこないが

誹謗する書き付けも やつてこない

紫のもや 白い雲

そんな奥深い所で 門閉ざす

村人ら 叔父を訪ねて

仲裁の決済を こいねがう

けれども 門までやつてきて

しばし 考え事をするものの

やがては連れ立ち 帰り行く

子供を呼んで 琴を整え奏で

世俗の気を はらいたもう

それはあたかも 古の隠者

巢父か 許由か

いずれとも 言いがたし

(叢書「外集補」巻一、庫本『外集』巻十一、『全集』第三冊「外集」巻十五、『全宋詩』巻一〇一八
黄庭堅四〇)

叔度は、後漢の黄憲を指すだろう。叔度はその字。黄庭堅が「叔度」と言うのは計五例ある。右詩以外では、

① 「張子謙写子真請自贊」(張子謙 予が真を写し自贊を請ふ)

見人金玉满堂而不貪 人の金玉 堂に満つるを見るも貪らず
 看人鳳閣鸞台而不妬 人の鳳閣 鸞台(高也)なるも 妬ねたまず
 自疑是南岳懶瓚師 自ら疑ふ 是れ南岳らんざんの懶瓚師かと
 人言是前身黄叔度 人言ふ 是れ前身は黄叔度ならんと

張子謙が黄庭堅の肖像画を描いたついでに、自贊を求めそれに応じたもの。食らず妬まず、あたかも南岳の石窟に隠れ済んだ中唐期の懶瓚和尚か、はたまた前身はかの黄憲か。ここでは山谷自身を黄叔度に喩えている。

③ 「送彦孚主簿」元豊六年太和作(山谷、三十九歳)

斯文当両都 斯文 両都(両漢)に当たりて
 江夏世無双 江夏 世よ無双
 叔度初不言 叔度(黄憲) 初めて言はず
 漢庭望風降 漢庭 (清廉な) 風の降るを望む
 中間眇人物 中間 人物眇たるも

潜伏老崆峒	潜伏して 崆峒 <small>(深い山谷)</small> に老ゆ
本朝開典礼	本朝 典礼を開き
棧樸作株椿	棧樸 <small>(いさばく)</small> (雑木)を 株椿 <small>(しゆん)</small> (立派な木)と作す
世父盛文藻	世父 文藻盛んに
如陸海潘江	陸海 <small>(りくかい)</small> (陸機の文) 潘江 <small>(はんかう)</small> (潘岳の詩)の如し
夢升臥南陽	夢升 <small>(七叔祖・黄注)</small> 南陽に臥し
耆旧無兩龐	耆旧 <small>(りやうほう)</small> 兩 <small>(りやうほう)</small> 龐 <small>(りやうほう)</small> 無し
空鏡歐陽銘	空しく鏡る 歐陽 <small>(ほ)</small> (修)の銘 <small>(墓誌銘)</small>
松風悲隴瀧	松風 隴瀧 <small>(りうせう)</small> (南陽の山水)に悲し
四海群從間	四海 群從 <small>(ぐんじゆう)</small> (子や兄弟の子ら)の間
爾來頗瑒淙	爾來 <small>(最近)</small> 頗る瑒淙 <small>(そうそう)</small> (玉の響き)たり
主簿吾宗秀	主簿 吾が宗の秀
其能任為邦	其れ任を能くし 邦を為めん
軀幹雖眇小	軀幹 眇小と雖も
勇沈鼎可扛	勇沈 鼎 扛 <small>(もちあ)</small> ぐべし

漢代以来の黄家の歴史を振り返り、かつて文学をもつて代々聞こえたが、隠士・黄憲の時に初めて寡黙となり、

以後、低迷の時代が続く。わが宋朝になつて再び黄家は文藻盛んな様相を見せるようになり、七叔祖の黄注は歐陽修公とも親しかった（後述）。が、南陽に没し、歐陽公の墓誌銘が空しく残っている。黄家の子孫は国中にいるが、最近、その中では黄彦孚げんぷ主簿が光っている。政務をよくこなし、体は小さいが、勇敢・沈着だ。云々。

④「沐岸置酒贈黄十七」元豊三年 授太和発沐京作

吾宗端居叢百憂 吾が宗 端居して 百憂むら叢がる

長歌勸之肯出遊 長歌して之に勸む 肯へて出遊せんと

黄流不解浣明月 黄流 明月をけが浣すを解さず

碧樹為我生涼秋 碧樹 吾が為に涼秋を生ず

初平群羊置莫問 初しよ平 群羊 置きて問ふ莫し

叔度千頃醉即休 叔度 千頃 醉へば即ち休やむ

誰倚柁樓吹玉笛 誰ぞ柁だう樓に倚り 玉笛を吹く

斗杓寒挂屋山頭 斗杓とひよう 寒く挂かる 屋山おくさんの頭

黄十七は、山谷が若い頃強い影響を受けた少し年長の友人、黄介（幾復）。現今の官場に深いためらいを持つ幾

復に、気分転換でもせられよと説く。そして、こう励ます。どんなに濁った河でも明月（一君）を汚すことはできない。この緑の木々も僕らに涼風を届けてくれているよと。こんな癒しの風が吹きすぎたなら、幾復の憂鬱もどこかへ拭われて行く思いがしたのではないか。

初平とは、葛洪『神仙伝』にある皇（黄とも記される）初平のこと。幾復はこの手の世界に詳しかったから、話題にしたのだろう。一初平は牧羊の世話をしていたが、四十余年も行方知れずとなった。金華山にいるらしいと聞いた兄の初起が行くと、無事再会はできたものの、どこにも羊がいない。それを問うと、初平が石に向かい「起きろ」と声を掛ける。すると、たちまち何万もの羊となったというじゃないか。（君にはいわずもがなのお話しだが、訳の分からない世の中なんぞ、放っておけよ）。

黄家にはまた黄憲なる有名な隠士もいたつて。スケールのでかい大人で、世の中のことにはとんと見向きもせず、酔っぱらったらハイそれでおしまいというような御仁だった（後出『後漢書』参照）。（幾復さんもいつちよ酔っ払ってみたら。）ああ、だれか屋形舟で笛を吹いて

いるよ。寒い空、民家の暮らしの上には北斗の輝きも見える。いいじゃないか。この清秋。酒でも飲んで俗臭に惑う世など捨てておこうよ。―山谷の一特色たる友人詠の典型作である。

史容の「叔度」注も、当然、後漢の黄憲のことで「郭林宗曰、〈叔度、汪汪若千頃陂〉」とある。この所引について委細は後述する通りである。

⑤ 「題欧率更書」

欧率更書、温良之氣襲人、然即之則可畏、頗似吾家叔度之為人。比来士大夫学此書、好作芒角兼利、政類阿巢爾。山谷云。

(唐初の) 欧陽詢(太子率更令―漏刻の管理官―を努めた)の書風は、温良の気というのがどつと押し寄せてくるが、その作品に即していると何とも畏怖の感が湧いてくる。わが黄家のかの叔度の人となりにとてもよく似ている。この頃、士大夫たちはこの書風を手本として学び、好んで筆鋒の鋭さを出しているが、「そうなると率更体

を好む上司にならつて、政界全体が追従の巢窟となるばかりだ」(―の意か)。山谷云う。

以上の例からも、黄庭堅がよく無欲・恬淡・博学の人柄を黄憲にたとえていることが分かる。では、その黄憲とはどんな人物なのか。『後漢書』卷五十三本伝にいう。

黄憲、字は叔度、汝南の慎陽の人なり。世よ貧賤にして、父は牛医為り。：林宗曰はく〈叔度、汪汪おうおうとして千頃の陂の若し。之を澄ますも清まず、之を淆にすも濁らず、量るべからざるなり〉と。：論に曰はく、〈黄憲の言論風旨、伝聞する所無きも、然れども士君子 之を見る者、深遠なるに服さざる靡なく、(己を振り返つて恥じ、自身の) 疵し(疵) 吝りん(欠点) を去かくさんとす。將まさに道あまねの周く性の全きを以てす。徳無くして称へられん乎〉と。

(黄憲字叔度、汝南慎陽人也。世貧賤、父為牛医。：林宗曰「叔度、汪汪若千頃陂。澄之不清、淆之不濁、不可量也。：論曰黄憲言論風旨、無所伝聞、然士君子見之者、靡不服深遠、去疵吝。將以道周性全。

無徳而称乎。)

まさしく高潔の君子そのものである。

ここからは、詩中の個別の語彙に即して見ていくこととする。一連の作業を進める過程で、ここでも欧陽修との関係を思わせる語彙が多く用いられていることに気づかされる。そこで、次にこの問題を少し取り上げよう。

まず「万象」「山骨」なる詩語だが、欧陽修「吳学士石屏歌」(嘉祐元年作 一〇五六/黄庭堅十二歳)に、

「借問す 此の景 誰か図写せると/乃ち是れ吳家(吳奎)の石屏なる者ぞ/號工(號州の石工) 山を剝り 山

骨を取り/朝に鑿し暮に研ること 一日に非ず/万象

皆 石中より出づ」(借問此景誰図写/乃是吳家石屏者

/號工剝山取山骨/朝鑿暮研非一日/万象皆從石中出)

とある。後注の「山骨」と併せ考えるに、よく類似する。

また梅堯臣「訪ねて本簡(地名か)の長老に報ず」(訪

報本簡長老)にも、「門は臨む 水 鑑の若くなるに

/万象 皆 観るべし」(門臨水若鑑/万象皆可観)と

ある。次に「山骨」だが、山中の石や巖の意。韓愈・劉

師服・侯喜らの「石鼎聯句」に、「巧匠 山骨を斲り/

中を剝めて 煎烹(物を煮る)を事とす」(巧匠斲山骨/

剝中事煎烹)がある。また梅堯臣「徐都官の仮山に新居

するに寄せて題す」(寄題徐都官新居仮山/慶曆三年

一〇四三/黄庭堅の生まれる二年前)の「太湖の万穴

山骨古く/共に峰嵐を結んで 勢 孤ならず」(太湖万

穴古山骨/共結峰嵐勢不孤)もあるが、前掲の欧陽修「吳

学士石屏歌」が、「万象」「山骨」をともに言う点にお

いて類す。

再び語注を掲げる。

○雲夢―洞庭湖を含む沼沢一帯。 ○漱滌―柳宗元「愚溪

詩序」に、「余 俗に合はざると雖も、亦た頗る文墨を以

て自ら慰む。万物を漱滌し、百態を牢籠(自由に取扱い)

して、之を避くる所無し」(余雖不合於俗、亦頗以文墨自

慰、漱滌万物、牢籠百態、而無所避之)。白居易「新鑿小

池詩」に、「官舎 狎弄すべく/昏煩 聊か漱滌せん」(官

舎可狎弄/昏煩聊漱滌)。

次に、「双井」という地名だが、宋・黄疇若「山谷塾祠記」（『黄庭堅全集』附録四）に、「修水 南のかた漢を辿り、東のかた双井に匯まる。是れ山谷先生の故居為り。而して墓道 焉に在り」（修水南辿於漢、東匯於双井、是為山谷先生故居。而墓道在焉）と記されるように、山谷の郷里である。「茶甘し」というのは、茶の特産地だったから。ここでまた欧陽修との関連が気になる。彼の「双井茶」（嘉祐六年／黄庭堅十七歳）に、「西江水清く 江石老ゆ／石上に茶生じて 鳳の爪の如し／窮臘も寒からずして 春気早く／双井 芽生ずること百草に先んず／白毛 囊は紅碧の紗を以てし／十斤の茶養（分に相当する） 一両の芽／長安の富貴 五侯の家／一たび啜れば 猶ほ須らく三日誇るべし」（西江水清江石老／石上生茶如鳳爪／窮臘不寒春気早／双井芽生先百草／白毛囊以紅碧紗／十斤茶養一両芽／長安富貴五侯家／一啜猶須三日誇）とあり、この欧陽修詩を黄庭堅は知っていたのではと思われる。

もう一つ忘れてならないのは、祖父黄滉と従兄弟だった前述の黄注（字は夢升）を、欧陽修が幼い時から尊敬

し、長じては天聖八年（一〇三〇）、同時に進士に合格している間柄だったという事実である。欧陽修「黄夢升墓誌銘」（慶曆三年／黄庭堅誕生の二年前）に、「予が友 黄君夢升、其の先は婺州の金華の人なるも、後に洪州の分寧に徙る。其の曾祖の諱は元吉、祖の諱は某、父の諱は中雅、皆仕へず。黄氏 世よ江南の大族為り。其の祖父より以来、樂しむに家貲を以て郷里を賑はし、多く書を聚めて以て四方の士を招く。夢升の兄弟 皆 学を好み、尤け文章の意気を以て自ら豪す。予 少きとき随に家す。夢升 其の（従）兄の茂宗（黄沔／夢升より十五年前に進士及第）の随に官たるに従ふ。予 童子為りて、諸兄の側に立ち、夢升を見るに年十七八、眉目明秀、善く飲酒談笑す。予 幼しと雖も、心は已に独り夢升のみを奇とす。後七年、予 夢升と皆 進士に挙げらるること京師に於いてす。云々」（予友黄君夢升、其先婺州金華人、後徙洪州之分寧。其曾祖諱元吉、祖諱某、父諱中雅、皆不仕。黄氏世為江南大族。自其祖父以来、樂以家貲賑郷里、多聚書以招四方之士。夢升兄弟皆好学、尤以文章意気自豪。予少家随。夢升従其兄茂宗官于随。予為童子、

立諸兄側、見夢升年十七八、眉目明秀、善飲酒談笑。予雖幼、心已独奇夢升。後七年、予与夢升皆举進士於京師。云々」という。ただ「後七年」は、この文脈では合わない。詳しくは洪本健氏の説を参照されたい〔④〕。

なお黄夢升の死については、南陽主簿に就いていたが、周囲は「皆俗吏」ばかりで「復た夢升を知らず。夢升素より剛なれば、苟も合はせられず、其の有する所に負き、常に怏怏として施す所無く、卒に志を得ざるを以て南陽に死す。夢升 諱は注、宝元二年四月二十五日卒す。享年四十有二」（不復知夢升。夢升素剛、不苟合、負其所、常怏怏无所施、卒以不得志死于南陽。夢升諱注、宝元二年（一〇三九）四月二十五日卒。享年四十有二）と記される。

続けて、「菌菝かんたん」（ハスの花）だが、梅堯臣「韻に依りて持国（韓維か）の（新たに西軒に植ゆ）に和す」（依韻和持国新植西軒／慶曆七年／黄庭堅三歳）に、「盎中おうちゆう（鉢）に菌菝を植ゆれば／水 升斗に過ぎず」（盎中植菌菝／水不過升斗）。欧陽修「西湖にて戯れに作り同游者に示す」（西湖戯作示同游者／皇祐元年 一〇四九／黄庭堅

五歳）に、「菌菝 香り清らかに 画舸浮き／使君 寧んぞ復た揚州を憶はむ」（菌菝香清画舸浮／使君寧復揚州）。同「聞穎州通判国博士：」（穎州通判国博士：を聞く／治平二年 一〇六五）に、「十里秋風紅菌菝／一溪春水碧漪漣」（十里 秋風 菌菝紅く／一溪 春水 漪漣いれん（さざ波）碧なり）等という。

黄家との深い因縁は欧陽修ばかりではない。梅堯臣また然りである。黄庭堅の岳父・謝景初（山谷、二十九歳の時に謝氏の娘と再婚）は、梅堯臣の妻の兄・謝絳の子にあたり、最初の『梅聖俞詩集』十巻の編集者でもある。欧陽修にその「梅聖俞詩集序」（慶曆六年／山谷二歳）があり、欧陽修がこれをもとに十五巻本に増補したのが、嘉祐六年（山谷十七歳）以降のことである〔⑤〕。いつの時点か不明だが、黄庭堅はその詩の尽くを見たこと記している。次の例を見られたい。

「雷太簡らいたかんの梅聖俞詩に跋す」〔⑥〕

余 雷太簡の才氣 高邁なるを聞く。此の詩を観るに、信まことに聞く所の如き也。梅聖俞と婦家と連有り、

嘗て悉く其の平生の詩を見れり。此の篇の是れ意を得し処の如きは、其の用字は穩実、句法は刻厲にして和氣有り。他人 此の功無き也。

「跋雷太簡梅聖俞詩」

（余聞雷太簡才氣高邁、觀此詩、信如所聞也。梅聖俞与婦家有連、嘗悉見其平生詩、如此篇是得意處、其用字穩実、句法刻厲而有和氣、他人無此功也。）

歐陽修・梅堯臣とのかくも深い関わりを、早期の山谷詩はその奥底に蔵しているかに思われるのである。

詩歌のその他の語釈を掲げる。

○樽俎―宴席。王安石「郎侍郎に寄す」（寄郎侍郎）詩に、「久しく願ふ 公の樽俎の客と作るを／恨むらくは 三歃の蓬蒿を斷る無きことを」（久願作公樽俎客／恨無三歃斷蓬蒿）。○此地端正―宋・文及（乃）翁「馬洲山谷記」（『黃庭堅全集』附録四）に、「大江以西、山水之秀、甲於天下。洪州分寧県、鍾秀居多。県有勝地曰馬洲、与鹿洞・象山・鵝湖・鷺洲相頡頏。梅・樊二峰、東西相望、道山屹其南、

鳳山蹲其北。：洵此方之佳境也」（これは書き下し文を略す）。東西南北、端然とした山水の配置で風水にも合うようだ。○除書―官職を拝命する時の文書。○謗書―他人を誹謗したり攻略したりする書函。『戦国策』秦策二に、「魏の文侯、楽羊をして将として、中山を攻めしむるに、三年にして之を抜く。楽羊、反つて功を語る。文侯、之に謗書一篋を示す。楽羊、再拝稽首して曰はく、『此れ臣の功に非ず、主君の力なり』と」（魏文侯令楽羊将、攻中山、三年而拔之。楽羊反而語功。文侯示之謗書一篋。楽羊再拝稽首曰、此非臣之功、主君之力也）。○漆園―『史記』莊周列伝に、「莊子は、蒙の人なり。名は周。周 嘗て蒙の漆園の吏と為る」（原文略）。ここは莊子の喩え。○斬木―『山谷外集詩注』卷五「題章和甫釣亭―放言」（元豊六年 一〇八三 山谷三十九歳）に、「木を斬り亭を開き／却つて石壁に倚る」（斬木開亭／却倚石壁）。○混沌鑿―『莊子』応帝王篇の有名な故事。「儻と忽と時に相与に渾沌の地に遇ふ。渾沌 之を待（た）つること甚だ善し。儻と忽と渾沌の徳に報ゆるを謀り」（原文略す）、人間と同じように混沌にも七つの穴（目・耳・口・鼻）を贈ることにな

り、一日に一つの穴を穿ったら七日で死んだという話。

五 「叔父釣亭」の叔父とは誰か

「叔父釣亭」 「叔父の釣亭」

檻外溪風拂面涼 檻外溪風 面を払ひて涼し

四圍春草自鉏荒 四圍春草 自ら荒を鉏く縁

陸沉霜髮爲釣直 陸に霜髮を沈めて 釣の直きを爲し

柳貫錦鱗縁餌香 柳の錦鱗を貫くは餌の香しき に縁

影落華亭千尺月 影は落つ 華亭 千尺の月

夢通歧下六州王 夢は通ず 岐下 六州の王

麒麟卧笑功名骨 麒麟 卧して笑ふ 功名の骨

不道山林日月長 道はず 山林 日月の長きを

「叔父の釣亭」

手すりの向こうの 沢の風

面をはらって 涼しいね

四方に伸びた 春草は

自分で草刈り さっぱりと

霜降る髪の毛の んききで

真つ直ぐな針 作つて暮らす

不器用な 御仁

錦織りなす 魚たちが

柳の芯に 連なるは

ただ餌が 香しいため

月夜の庭に 長々と落つるよ

華亭の辺り 千尺の竹の影

あの文与可の 絵のごとし

枕辺の夢は 遙かに通ずるよ

岐山の麓 六州を平らげた

あの古の 文王の世に

麒麟の石像 伏して笑う

功名の人も 今はただの骨と

叔父上は 決しておっしゃらぬ

山林住まいは 閑だなどと

〔叢書『外集詩注』巻一、宮内庁本『外集詩注』巻十三、庫本『外集』巻七、『全集』第二冊「外集」巻十、『全宋詩』巻九九九 黄庭堅二一）

黄庭堅が「叔父」と称するのは、黄育・黄襄・黄廉の三人。この叔父について、史容は誰かを注記しないが、これについて検討してみよう。まず黄育は、伯祖父・黄湜の子で、父庶のいとこ。黄庭堅より三歳上にすぎず、「霜髮」というのは合わない。これは除外してよい。その上で、『黄庭堅全集』は、この叔父を黄廉として扱う。一方、「黄氏宗系与家学淵源」で、黄家の家学を取り上げている楊慶存氏は、「黄襄字は聖謨、号は台源先生」といい、終生仕えず、家園に隠居し文墨を愛し、林泉にうそぶき、とりわけ老壯の学を好み、高い脱俗の気風をただよわせ、黄庭堅との唱和はすこぶる多く、今、集中には十数首が存する」として、「叔父釣亭」詩も掲げ、その「麒麟卧笑功名骨／不道山林日月長」を引く〔⑦〕。問題は、『黄庭堅全集』説と楊慶存氏説のいずれかというのだが、両説ともに根拠は何も記されておらず、そ

の根拠となりうるものがあるか、調べる必要がある。今回、この調査を通して黄庭堅が黄襄・黄廉から受けた精神的な影響の大きさを理解することができたので、次にこの「叔父」の特定、及びその人間像を論ずることとする。

まず黄襄（前掲の台源先生、父庶の兄弟）は、行政は不得手の高潔な隱士である。それを本詩は、「麒麟卧笑功名骨／不道山林日月長」、また「陸に霜髮を沈めて 鈎の直きを為し」と、その廉潔さを称える。が、一方では「夢は通ず 岐下 六州の王」というほどの賢良の人ともいう。この点が真に黄襄のこととして相応しいのが、大きなポイントである。

まず前掲の黄庭堅「叔父十九先生祭文」に、黄襄について「先生 既に世に求むる無く、世も亦た先生に求むる無し。所以に詩書に耄老し、丘壑に陸沈すれば、功烈述ぶる無く、文章昭らかならず。豈に悲しからず哉」と、本詩第三句「陸沈霜髮為鈎直」と同様の表現があることを確認したい。すなわち黄庭堅は、この叔父を「陸沈」する遺賢と見ているのである。

次に「夢は通ず 岐下 六州の王」だが、これが脱俗の遺賢の夢想として適切なものである。これに関する史容の注は以下の通り。

太公 渭浜に釣して文王に遇ふ。『帝王世紀』に曰はく、「諸侯の周に帰する者は六州。文王 臣節を失はず、六州の諸侯を合はせて以て紂に朝す」と。『毛詩』「芣苢」の正義に曰はく、「文王 六州を平らげ、武王 天下を平らぐ」と。『史記』「周本紀」に曰はく、「岐の下より都を豊に徙す」と。
(太公釣於渭浜、而遇文王。帝王世紀曰、諸侯歸周者六州。文王不失臣節、合六州之諸侯、以朝紂。毛詩芣苢、正義曰、文王平六州、武王平天下。史記周紀曰、自岐下而徙都豊。)

これは太公望呂尚が文王に見出され、その政治を補佐して「六州の王」とし、後に武王による天下平定の基を作るのに貢献したことをいう。つまり、この「叔父」が呂尚のごとき政治的感覚の持主であることをいう。

その政治性とは、どのようなものなのか。遺賢としての域を超えないのか、実際に仕官を求める所まで行くのか。史容注にないが、黄庭堅「九井璜」(「張益老十二琴銘」其十一『同全集』「正集」卷二十一／元祐二年、黄庭堅四十三歳の作)に同様の表現があるのを元に考えてみよう。「呂尚のように」魚を釣りて 九井の璜を得／紂を辟けて 六州の王に遇ふ／堙沈たるかな 射の谷／委蛇たるかな(遙かに連なる様) 鳴鳳の堂／其の音 爽(礼儀にそむく意)はず／ 維れ其の徳の常なり(「鈎魚而得九井之璜／關紂而遇六州之王／堙沈乎射射之谷／委蛇乎鳴鳳之堂／其音不爽／維其徳之常」。隠士にして隠士ならず、出仕前の呂尚の高貴な遺賢像を借りて、張益老が鮒(小魚の喩え) しかないような谷で功績を上げようとするよりも、むしろ隠士として「堙沈」(陸沈と同義) し、琴の音色に心を澄まして、もつと遙かな「鳴鳳の堂」(文王の世のごとき徳政の喩え)を願うほうがよい。それは礼にそむくものではなく、徳のあり方として常のものだと、そう励ましたものである。またそういう徳治への思いの時をもたらしてくれる名琴

への称赞（蘇軾にも「十二琴銘」があるが、これは山谷の作を誤つて蘇軾の集に混入したもの。張志烈はか編『蘇軾全集校注』第十二冊「文集」三・二一一三頁を参照）として作られている。つまり、無官・微官でも徳治の実

現を願う高邁な士大夫としての矜持を高く称揚するといふ主旨なのであり、実際に顕官に登らなければならぬことを期待する言ではない。したがつてこの「叔父」を、台源先生こと黄襄と見るのは自然な推測といえる。

が、そう結論付ける前に、黄廉（父の弟で、夷仲叔父・叔父夷仲・給事叔父・八叔父・大父等と称される）の場合はどうか、これについても確認しておく必要がある。黄廉に関して最も詳しいのは、「叔父給事行状」（『黄庭堅全集』第三冊「別集」卷九）である。

公少くして進士に挙げられ、声 場屋の間に有り。

嘉祐六年（一〇六一）進士の第に登り、宣州司理参軍を授けらる。大獄を治むること 亡慮百数、其の情を得ざる無し。公 官を去るや、老獄吏 嘗て窃かに嘆息し、以為く「獄官 能く心を治獄に尽くし、

欺むかざること 秋毫を以てし、仁厚く精密にす。

前後 未だ其の比を見ず」と。虔州の会昌令に移るや、公家を治むること 私を営むが如く、民の病めるを視ること 己に在るが如し。会昌の民 健訟

（訴訟好き）にして、善く匿情（事実や本心を隠す）

して獄を成す。戸婚（家族や夫婦）の事 多くは久しく決せず。公 導教を開（説）き之に勧め、待するに恩意を以てせしむ。鉤（法規）に因りて其の曲直を索ぬれば、久しうして乃ち皆服す。其の大獄を治むるや、伝へ道ふべきこと多し。蓋し世の仁厚き吏と称ふる者は、徒らに苟めに之を生かさんと欲するのみも、公は則ち然らず。曲折せるも（こみ入った事情も） 務めて其の情を尽くして、冤ならざらしむるを要め 然る後に已む。故に会昌の民今に至るも之を思ふ。

（公少挙進士、有声場屋間。登嘉祐六年進士第、授宣州司理参軍。治大獄亡慮百数、無不得其情。公去官、老獄吏嘗窃嘆息、以為獄官能尽心於治獄、不可欺以秋毫、仁厚精密。前後未見其比。移虔州会昌令、

治公家如當私、視民病如在已。會昌民健訟、善匿情成獄。戸婚事多久不決。公開導教勸之、待以恩意。

因鈎索其曲直、久乃皆服。其治大獄、多可伝道。蓋世称仁厚吏者、徒苟欲生之。公則不然。曲折務尽其情、要使不冤然後已。故會昌民至今思之。(一)

黄廉は後に王安石とともに新法の改革に従事し、しばしば皇帝に上奏するほどの高官だった。哲宗の元祐七年(一〇九二)五月十四日、給事をもって没した。またいわく、

公書を読むに常に自ら意を得、以て学問の本と為す。力行するに在りては、聞く所なる(自分の見聞き得た範囲)のみ。過を改むるに憚ることなく自ら新しくし、善く規諫の言を用ふるに、一言もて善くす。終身之を紀(守り通)とす。其れ不義に於いては、小心として畏れ避ければ、人其の怯ゆるを笑ふ。義を見て行ふこと、膽氣烈烈として嘆息せざる無し。∴公の天資は潔清にして、其の義に

非ざれば、飲食の物と雖も、虚受(不当に受領)せざるなり。

(公読書常自得意、以為学問之本。在力行所聞而已。不憚改過自新、善用規諫之言、一言而善。終身紀之。其於不義、小心畏避、人笑其怯。見義而行、膽氣烈烈無不嘆息)「公天資潔清、非其義、雖飲食之物、不虛受也。」

以上のように黄襄・黄廉の両叔父を比較すると、その吏隱的氣質、及び才覚の違いは明白であり、「叔父釣亭」の叔父とは、隱士・台源先生こと黄襄のことと断定できる。ここで次の問題となってくるのは、このような詩を書いた黄庭堅の思いが那邊にあつたのかだが、これについては末尾に述べることにする。

○扞面——本詩の七年後の作だが、熙寧六年(一〇七三)の蘇軾「湖上、夜帰る」詩に、「籃輿(らんよ)湖上帰れば／春風面を吹きて涼し」(籃輿湖上帰／春風吹面涼 『蘇軾詩集』卷九 中華書局)という。水面を渡ってくる春風には、格

別の涼感が感じられる。○鉏荒―*杜甫「嚴公が寄せて野亭に題せる作に酬ひ奉る」（奉酬嚴公寄題野亭之作）に、「枉まげて沐もす（忝なくも恩に浴する嚴武公の）旌せい塵ちん城府を出づるに／（わが）草茅 徑無し 鉏すか教かしめんと欲す」（枉沐旌塵出城府／草茅無徑欲教鉏／『杜詩詳注』卷十）。

これは人に草刈りをさせた例。又いわく、*「葵荒欲自鉏」と。前詩「十九叔父台源に次韻す」の語注を参照。杜甫「秋野五首」其一「荒こうを鉏すき 三徑さんけい通ると」。これは自身の草刈りらしい。同様の喜びを詠むのは、梅堯臣「真州の東園」詩（『梅堯臣集編年校注』卷二十五 至和二年 一〇五五 五十四歳）に、「新春 力余り有り／荒を鉏く、東乳（東園のこと、―ここは場所として） 偏へんす」（新春力有余／荒を鉏く、東余／鋤荒東乳偏）の例。この自ら「鋤く」のは、黃庭堅の常用語。一二例挙げれば「李徳素の舒城に帰るを送る」（送李徳素帰舒城／内集卷七）に、「李侯 我が為に来たり／遽にかに帰期を以て請ふ／青衿 詩書を廢さん／白髮 定省ていせい（親に仕える意） 違ふ／荒畦 当に鉏灌じよかんすべく／蠹簡とくかん（虫食いの本） 籤せん整せい（本の札を整理すること）を要す／衣を輓ひくも 留りうむべからず／決去けつきよして幽屏ゆうびんを事とせんと」（李

侯為我来／遽以帰期請／青衿廢詩書／白髮違定省／荒畦当鉏灌／蠹簡要籤整／挽衣不可留／決去事幽屏）。「戯れに荊州の王充道の茶を烹るに答ふ 四首」其一（戯答荊州王充道烹茶／内集卷十六）に、「三徑 鉏くと雖も 客自から稀なり／醉郷 安穩なれば（この地を離れて） 更に何いくにか之ゆかん」（三徑雖鉏客自稀／醉郷安穩更何之）等とあり。自給自足の代詞。○陸沈―*『史記』「滑稽伝」に、世間から狂人視されていた東方朔が宴席で歌をうたい、「俗に陸沈し、世を金馬門に避けん。宮殿の中、以て世を避け身を全ふすべし。何ぞ必ずしも深山の中、蒿廬こうろの下のみならんや」（陸沈於俗、避世金馬門。宮殿中、可以避世全身。何必深山中蒿廬下）と言ったという。ここでは叔父・襄の「先生 既に世に求むる無く、世も亦た先生に求むる無し。所以に詩書に耄老し、丘壑に陸沈す」（前掲「叔父十九先生祭文」）る姿をいう。○鉤直―*『楚辞』東方朔「七諫」の「諫諫」に、「直針を以て鉤を為さば、維これ何の魚の能く得んや」（以直針而為鉤／維何魚之能得）。ただし『楚辞』諸本（王逸『章句』・洪興祖『補注』・陸時雍『疏』）は、「以直鍼而為釣兮／又何魚之能得」に作る。また*盧

全「直釣吟」も注し、「初歳 魚を釣るを学ぶに／自ら謂へらく 魚 得やすしと／三十にして 釣竿を持ち／一魚も釣ること得ず／人の釣は曲 我が釣は直／嗟哉 我が釣反つて食らふ無し／文王 已に没して復た生きず／直釣の道 何れの時に行はれん」(初歳学釣魚／自謂魚易得／三十持釣竿／一魚釣不得／人釣曲我釣直／哀哉我釣一作釣又無食文王既一作已没不復生血釣之道)と。世道の険しさ故に、己の「直釣」が生かされないことを嘆く。○柳貫一*「石鼓文：其魚維何／維鱗与鯉」と。史容の引く「石鼓文」は、黄庭堅「次韻曾子開舍人游籍田載荷花婦」(『内集』卷三)、「文安国挽詞」(同卷十八)の任淵注に引く「石鼓文曰、其魚維何／維鱗与鯉／何以貫之／維楊与柳」を参照しただろう。ただ「謝榮緒惠賜鮮鯽」(同卷十九)、「次韻答和甫盧泉水」(『外集』卷十四)は、「維鱗与鯉」が「維鱗維鯉」となっている。なお「柳貫」の語彙としては、蘇軾「石鼓」に、周・史籀「石鼓」を引いて「我が車 既に攻く 馬も亦た同じ／其の魚 維れ鱗 之を柳に貫く」(我車既攻馬亦同／其魚維鱗貫之柳)／『蘇軾詩集』卷三四／嘉祐六年作／この時、黄庭堅は十七歳」というのに近い。

黄庭堅、これを踏まえよう。なお韓愈「石鼓歌」、歐陽修「石鼓文」あり。○餌香一*「吕氏春秋」「仲春紀」功名に、「善く釣る者、十 仞の下に漁するは、餌の香しければなり」(善釣者、獵乎十仞之下、餌香也)という。また*韓愈「独釣四首」其三に「鳥の下るは 人の寂しきを見／魚の来たれるは 餌の馨しきを聞けばなり」(鳥下見人寂／魚来聞餌馨)とある。直接には台源先生の不器用さというが、その内実は別にある。後述す。○影落華亭千尺月一*蘇軾「文与可 詩有り、寄せられて云ふ。一段の鵝溪絹を將るを待つて／掃ひ取らん 寒稍 万尺の長きを」と。次韻して之に答ふに答ふ」(文与可有詩、見寄云、(待将一段鵝溪絹／掃取寒稍万尺長)次韻答之)という、「世間に亦た千尋の竹有り／月落ち 亭空しく 影許くも長きからん」(世間亦有千尋竹／月落庭空影許長 『蘇軾詩集』卷十六／元豊元年 この時、黄庭堅三十四歳)と。また*「文与可の面ける篔簹谷の偃竹記」(文与可画篔簹谷偃竹記)／『蘇軾文集』卷十一 元豊二年)も注する。いづれも本詩の後の作だが、蘇軾と文与可との間で「千尋の竹」の有無をめぐるやり取りがあった旨を注記することで、

史容は黄襄もかくも深く文雅の道に親しんでいることを示

そうとしたのだろう。なお『山谷詩集注』の黄宝華注にあ

るように、宮内庁・図書寮本（元・至元本。史容は初めは

詩体別に分けた体裁で『外集詩注』を編んだが、後に編年

体に修正した。本書は詩体別のもの〔⑧〕、『外集』巻十

三所収の本詩は、この「文与可画筥簞谷偃竹記」の下に、

続けて「華亭は乃ち秀州の属邑、釣亭は当に此に在り」（華

亭乃秀州属邑、釣亭当在此）と記すが、秀州は浙江省嘉興

府であり、本詩は郷里の分寧での作と思われるから、合わ

ない。したがって編年本は、この一文を削除したとする。

黄宝華注の丁寧さを示す一例。○六州王―前注に論ずる

のを参照。

注

作於年輕未第時」とあり。

②『山谷詞校注』（注①に同じ）による。

③周裕鍇『文字禅与宋代詩学』（高等教育出版社 一九九八）第

三章「話語的転換…」文字禅」与宋代詩論」に、本詩を引い

て三祖僧璨『信心銘』「一即一切、一切即一、但能如是、何

慮不畢」（『景德伝燈録』卷三十）、积玄覺『永嘉証道歌』「一

法圓通一切性、一法遍含一切法。一月普現一切水、一切水月

一月掬」を掲げるが、万法平等・本無差別の思想的共通性は

あるけれども表現が全く異なる。

④洪本健『歐陽修詩文集校箋』（上海古籍出版社 二〇〇九）「箋

注」七五八頁を参照。

⑤朱東潤『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社 一九八〇）「序

論三 梅堯臣的版本」に詳しい。

⑥『黄庭堅全集』（四川大学出版社 二〇〇一）第二冊、正集卷

二十五。

⑦楊慶存『黄庭堅与宋代文化』（河南大学出版社 二〇〇二）

⑧拙稿「黄庭堅「外集」「外集詩注」「外集補」考―宮内庁・内

閣文庫宋元刻本に関連して―」（『名古屋大学中国語学文学

論集』第二十三輯 二〇一一）を参照。（続く）

①鄭永暁著『黄庭堅年譜新編』（社会科学文献出版社 一九

九九）の「仁宗嘉祐七年 十八歳」条。また『山谷詞校注』

（馬興榮・祝振玉校注 中国古典文学叢書 上海古籍出版

社 修訂再版 二〇一一）の「惜餘歛」の箋注に「此首当